

平成21年度 森プロ事業実績：椿森プロ

(平成22年3月末現在)

	H19～20年度		H21年度				5力年	
	計画	実績	計画	実績	達成率	備考	計画	
集約化(ha)	240	351	125	6	5%		516	
作業道(m)	11,000	12,494	6,000	376	6%	作業路含む	24,000	
間伐等	面積(ha)	135	78	90	39	43%	利用+切捨	475
	材積(m ³)	5,000	6,697	4,000	2,117	53%	支障木含む	21,000
備考								

H21年度利用間伐等における所有者への還元額(補助金含む)

1,500円/m³(予定)

施業集約化の状況

- ・森林組合が地元精通者の協力を得ながら森林所有者へ説明を行い、集約化を進めている。

施業プランの活用状況

- ・精算時において施業プラン(書式)を用いて森林所有者へ説明及び精算を行う方針。
(H19は仮精算済、H20、21はH22にまとめて仮精算を行う。)

施業プランナーの養成状況

- ・地域総合プランナー: 1名(H19実績)
- ・森林施業プランナー: 1名(H19実績)

作業道の状況

- ・作業道開設目標: 主伐期まで(30年以上)継続的に使用可能な作業道の開設。
(幅員3.6mを原則として、100m以内の作業路や30度を超える急傾斜地では3.0mも併用)
- ・作業道開設方針: ①絶対的な安定路盤の整備、②細心にして大胆な集排水対策、③可能な限りのメンテナンスフリー。
- ・作業道の開設は、安易に作りやすいところに作るのではなく、100年を通して一番利益の上がるところに「道をレイアウトする」。

作業道開設



作業道開設後



作業道の開設状況

- ・伐採チームと掘削チームの連携により必要最小限の伐開幅で開設。
- ・レキと土とを適度に混合、徹底的な転圧作業を行う。
- ・転石は路肩や盛土に埋設し、補強。

完成した作業道

- ・8tトラックが走行可能な幹線作業道を整備。
- ・排水は分散化。雨が降ったときに雨水の流れを確認して排水位置を決定。
- ・丸太組工法により道の崩壊を防ぎ、安全性を向上。

作業システムの状況

- ・平成21年度の素材生産性:最大65~75m³/日・3人の生産体制を確立。
- ・木にさわらないことを徹底させることにより、コストダウンを実現。

<メインシステム>

チェーンソー(伐倒、枝払い) → グラップル(木寄せ) → フォワーダ(搬出) → チェーンソーまたはプロセッサ(造材) → グラップル(積込)

※土木機械を改良した日本の林業機械を活用した場合の車両系モデルの限界に挑戦!

伐材工程



チェーンソーで作業道に向けて伐倒し、グラップルで長材のまま積み込み。

運搬工程



フォワーダは、作業道の痛みが少なく、急傾斜にも対応。長材を大量に運搬できる。

造材工程



造材・仕分けは広い土場(平場)で作業の安全性と効率性を確保。
造材担当者が、曲がりや市場動向に合わせて造材。付加価値の高い木材生産が可能。

造材工程



21年度にプロセッサを導入。さらなる生産性の向上を目指す。

その他

- ・林業関係者及び他業種からも幅広い人材交流を図るため、研修・視察の受け入れに積極的に対応。(視察者の一例:ひだ林業・建設業森づくり協議会、いび森林資源活用センター協議会、林野庁、JAPICなど。)
- ・民間事業者が、国・県のフォーラムで森プロの必要性について広報活動を実施。

森プロの成果

- ・路網整備と高性能林業機械を組み合わせた長伐期・非皆伐による森林づくりの一つのモデルとして実証・確立。
- ・作業道開設により森林所有者の自己山林への意識を高揚。
- ・森林組合の利用間伐に向けた選木や作業道の設計監理技術の向上。

今後の課題

- ・森プロ1期生として、県内外への森林づくりの指導・啓発。
- ・組合経営や事業地の損益分岐把握のため、森林施業プランの作成、運用が必要。
- ・森林組合の経営合理化に努め、コストダウンを図る。
- ・H21は作業道の所有者同意に時間を要し、作業道開設、素材生産量とも計画を下回った。H22は残る事業地である椿谷西側の整備を行う。(椿谷東側の整備はH21までにほぼ完了)